

## 対人不安についての素因ストレスモデルの検証<sup>1)</sup>

### —— 公的自己意識は対人不安の発生にどう関与するのか

An examination of diathesis-stress model for social anxiety:  
From public self-consciousness to social anxiety

伊藤由美

丹野義彦

東京大学大学院総合文化研究科

東京大学大学院総合文化研究科

#### 目 的

公的自己意識とは、自分の容姿、行動、発言、態度など、他者から容易に観察されるような自己の公的な側面に注意を向けやすいパーソナリティ特性のことであり、Fenigstein, Scheier & Buss (1975) によって提起された概念である。対人不安と公的自己意識に深い関連があることは、Buss (1980) が対人不安が生じるための共通の要素として大きく取り上げたことを始めとして、従来から指摘されているが、Leary (1983a) は、それらの研究を総括して、公的自己意識は対人不安の必要条件だろうと述べている。また、菅原 (1988) も、公的自己意識が対人不安の必要条件である可能性を主張している。しかしこれらの研究は横断的な研究にとどまっており、両者の因果関係についてまでを検証するには至っていない。

素因ストレスモデルとは、一定の素因(脆弱性)を持つ人が、ストレッサーとなるようなネガティブなライフイベントに遭遇した時に精神病理を発症するという考え方であり、この考え方を実証可能な形で提示したのはMetalsky, Halberstadt & Abramson (1987) による抑うつの研究である。これ以後、これを応用した実証的研究が盛んに行われている(坂本, 1997; 高比良, 2000)。本研究ではこれらにならない、従来から対人不安との関連が指摘されてきた公的自己意識を素因として、対人不安について素因ストレスモデルが成り立つのかを検討した。

#### 方 法

**手続き** 大学生を対象に2回にわたって縦断調査を行った。第1回調査(Time 1)では、相互作用不安尺度、公的自己意識尺度を用いた。第2回調査(Time 2)では、相互作用不安尺度、対人関係ストレス尺度を用いた。調査間隔は2週間とした。

**被検者** 調査に2回とも参加した被検者281名(男性211名、女性70名、平均年齢18.80歳)を分析の対象とした。

#### 質問紙

**1. 相互作用不安尺度**：対人不安感の測定には、Leary (1983b) による相互作用不安尺度の日本語版15項目(岡林・生和, 1991)を使用した。この2週間の自分自身を思い浮かべるよう指示し、項目内容について「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

**2. 公的自己意識尺度<sup>2)</sup>**：Fenigstein et al. (1975) の公的自己意識尺度の日本語版7項目(辻, 1993)を使用した。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4件法で回答を求めた。

**3. 対人関係ストレス尺度**：大学生の日常的なライフイベントを測定する大学生用生活体験尺度(久田・丹羽, 1987)の項目を厳選した対人関係ストレス尺度10項目を使用した。記載されている出来事について、Time 1からTime 2までの2週間の間に体験したか否かについて回答を求めた。

**分析法** Metalsky et al. (1987) に従い階層的重回帰分析(Cohen & Cohen, 1983)を行った。これは、重回帰分析を行う際に投入する変数に順序を設けることにより、重相関係数の増加分を検討する分析法である。この分析に先立って、Cohen & Cohen (1983) に従い、回帰の等質性を確認した。

#### 結 果

Time 2の対人不安得点を目的変数とし、最初に共変量としてTime 1の対人不安得点を回帰式に投入した。次に公的自己意識得点と対人関係ストレス得点をそれぞれ主効果として同時に投入し、最後に公的自己意識得点と対人関係ストレス得点の積を交互作用として投入した。その結果、交互作用( $F(1,276) = 3.21, p < .10$ )のみに有意傾向がみられた(Table 1)。そこで、この交互作用効果の内容を調べるために、Cohen & Cohen (1983, p.323, p.419)の手続きにならない、以下の分析を行った。これは、Time 2の対人不安得点を目的変数とする回帰方程式に、Time 1の対人不安得点の平均得点と、公的自己意識、対人関係ストレスそれぞれの平均得点±1標準偏差を代入することによって、(a) 公的自己意識高・対人関係ストレス高、(b) 公的自己意識高・対人関係ストレス低、(c) 公的自己意識低・対人関係ストレス高、(d) 公的自己意識低・対人関係ストレス低、の4つの場合におけるTime 2の対人不安得点を予測し、それぞれの値とTime 1の対人不安得点の平均得点との差をとることにより、対人不安得点の変化量を算出するというものである。

その結果、Figure 1に示したように、公的自己意識得点が高い人が高い対人関係ストレスを経験すると相対的に対人不安感が高まるのに対し、公的自己意識得点が高い人が高い対人関係ストレスを経験すると対人不安感はむしろ相対的に低下していた<sup>3)</sup>。この結果は素因ストレスモデルを支持するものであるといえる。

#### 考 察

本研究の結果、対人不安の発生メカニズムについて、公的自己意識を素因とする素因ストレスモデルが成り立つことが示された。本研究は縦断調査を用いたため、原理的には、横断調査によっては明らかにできなかった、公的自己意識が対人不安の発生に原因として関与しているということを確認することができた。つまり、高い公的自己意

Table 1 公的自己意識、対人関係ストレス、およびそれらの交互作用による Time 1 から Time 2 における対人不安得点の変化の予測

変数の投入順序	説明変数	F 値	t 値	df	pr <sup>a)</sup>
1 共変量	対人不安 (1 回目)	855.6**	(1.279)	0.87	
2 主効果		0.76	(2.277)		
	公的自己意識		-0.69	277	0.042
	対人関係ストレス		-1.71*	277	0.10
3 交互作用	公的自己意識×対人関係ストレス	3.21*	(1.276)	0.12	

\* $p < .10$  \*\* $p < .05$  \*\*\* $p < .01$ 

a) pr (partial correlation; 偏相関係数) は、投入された各説明変数が、対人不安得点の変化 (T1 から T2) の予測に対して与える効果を表す。

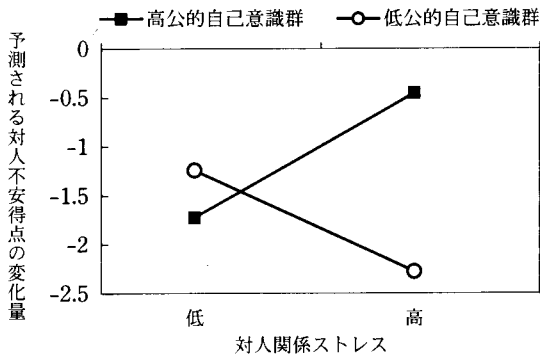


Figure 1 公的自己意識の高得点者 (+1 SD) と低得点者 (-1 SD) が、対人関係のストレスを多く (+1 SD) あるいは少なく (-1 SD) 経験したときに、回帰式より予測される対人不安得点の変化量

識は、対人不安の結果ではなく原因であるという関係が示されたと言える。菅原 (1988) によると、公的自己意識と対人不安の関係について散布図を描くと、公的自己意識が高いからといって必ずしも対人不安傾向も高いとは言えないが、逆に対人不安傾向の高い者の公的自己意識は皆高いという分布型になるという。このことから菅原 (1988) は「公的自己意識の高さは対人不安傾向が形成されるための一種の心理的土壌である」と述べている。今回の結果から「高い公的自己意識という心理的土壌に対人関係のストレスという要素が加わった場合に対人不安が生じる」という可能性が示されたと言えるだろう。

- 1) 本論文は、第一著者の平成13年度東京大学教養学部卒業論文の一部を加筆、訂正したものである。東京大学大学院総合文化研究科の毛利伊吹氏 (現帝京大学)、森本幸子氏、佐々木淳氏から、この論文作成に有益な助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。
- 2) 公的自己意識尺度の再検査法による信頼性係数 (間隔は2週間) は0.84と十分高い値が報告されている (Fenigstein et al., 1975)。
- 3) なぜ公的自己意識得点が高い人が高い対人関係ストレスを経験すると対人不安感がむしろ相対的に低まるのかについてであるが、対人関係のストレスをきっかけに、ストレスとなるような対人場面に対する認知的な対処の仕方を学習し、逆に対人不安感が弱まるようになるなどの可能性が考えられるが、それらは本研究のような量的研究の範囲を超えた問題であり、今後質的研究によって検討されていくべき課題であると考えられる。

対人不安に悩む学生の多さを考えると、本研究の結果は介入法にも示唆を与える。例えば、環境や人間関係の急激な変化などのストレスにさらされている入学直後や進学直後の学生に対して、公的自己意識の高さが一時的に対人不安を高める可能性のあることを教えておくことによって、対人不安をこじらせ慢性化させることを予防できるかもしれない。

## 引用文献

- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Cohen, J., & Cohen, P. 1983 *Applied multiple regression / correlation analysis for the behavioral sciences*. 2nd ed. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 久田 満・丹羽郁夫 1987 大学生の生活ストレス一測定に関する研究 — 大学生用生活体験尺度の作成 慶應大学大学院社会学研究科紀要, **27**, 45-55.
- Leary, M. R. 1983 a *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. Beverly Hills: Sage Publications. (生和秀敏 監訳 1990 対人不安 北大路書房)
- Leary, M. R. 1983 b Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, **47**, 66-75.
- Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J., & Abramson, L. Y. 1987 Vulnerability to depressive mood reactions: Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 386-393.
- 岡林尚子・生和秀敏 1991 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究 広島大学総合科学部紀要, **15**, 1-9.
- 坂本真士 1997 自己注目と抑うつ の社会心理学 東京大学出版会
- 菅原健介 1988 対人不安研究における公的自己意識の意義について 東京都立大学人文学部「人文学報」, **196**, 103-116.
- 高比良美詠子 2000 抑うつ のホープレスネス理論における領域一致仮説の検討 心理学研究, **71**, 197-204.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 2002. 8. 1 受稿 2003. 5. 7 受理—